



## 性と詩的想像力：W.B.イェイツをめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 川上, 武志 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00004360">https://doi.org/10.32150/00004360</a>

## 性と詩的想像力 ——W. B. イェイツをめぐって——

川上武志

イェイツが後年（50才過ぎ）書き残した『回顧録』（Memoirs）には、若い時分の性的経験を率直に語っている部分がある。<sup>(1)</sup>しかも、詩人が特に自からの青少年時代の性について書き残した唯一の文章と思われる。これには彼は27才になるまで、キスはおろか女性との性的交渉を一切持たなかったとある。先ず、ヴィクトリア朝期という時代背景と詩人の属する階級が、その性意識を反映しているものと考えられる。そこでイェイツの家系を見ると、父方の先祖（祖父と曾祖父）は二代に渡って国教会（福音教会派）の牧師を努めている。初め弁護士志望であった父も、プロテスタント子弟の最高教育機関であるトリニティ・カレッジ（Trinity College）に学んでいる。ミル（J. S. Mill）に傾倒するなど、自由主義的な気質と合理的精神の持主であったようである。もっとも、父からのイェイツに対するこの方面での思想的影響は、大きいものとは言えない。その父は後に著名な画家となるのであるが、イェイツ家はある程度裕福なプロテスタント系の中産階級に属していた。ヴィクトリア朝後期に青年時代を過ごした詩人は、この期中産階級に顕著な性的抑圧に悩まされたと告白する。果してヴィクトリア朝期が、全面的に性を抑圧した時代であったかどうかについては、種々意見がある。しかし少なくとも、中産階級およびその予備軍といわれる新興階級については首肯されるだろう。また庶民向けのピューリタニズムと言われるメソジスト派は、新しい社会秩序の条件である労働者階級を支配するには、その性生活の鎮静がとりわけ必要であると考えた。これには下層階級にあっては、既に18世紀末から（第一次）性革命が始まっていたとするE. ショーター（E. Shorter）の指摘<sup>(2)</sup>とつき合わせることはできる。『回顧録』での情婦を持ち売春婦を買う友人達の行状を語る下は、時代特有の性の二重規範（double standards）を垣間みせる。さらに少年時代からの自慰体験、それに伴う疲労感と嫌悪感を赤裸々に語る箇所は、S. A. D. テッソに始まる学説——マスターベーションが体力を弱め、生殖器や腸に重大な障害をもたらすという意見とその忌避への警告が、<sup>(3)</sup>広く浸透していた時代の性道徳を反映しているとも言えよう。しかし着目すべきは、詩人が「或る一人の女性への愛が自分を欺瞞的な禁欲に落ちいらせている」と語る場所である。その当の女性、“永遠の女性”と例えられるモード・ゴン（Maud Gonne）に出会ったのは、イェイツ23才（モード22才）の時であった。イェイツと彼女との関係は、実際、生涯に渡る片想いとも言えるもので、その意味でモードはロマン主義の伝統である「宿命の女」（femme fatale）に相当する。そして詩人は若くしてその探求に向かうことになる。

### I

一般にヴィクトリア朝期の詩人達の性的対象（女性）のとり扱いは、性の二重規範の表の部分——殊に道徳面における強調を伴って、極端に女性崇拝的であり理想化する傾向をもっていた。また彼等は、それに伴って非常にロマンテックな性概念を抱くのである。<sup>(4)</sup>女性達は、生身の肉体を持たないものとしてしばし

ば描かれる。ヴィクトリア朝後期にその文学活動を初めるイエイツの初期の詩も、唯美的・ラファエル前派風に味付けされており、多分にこのことが当てはまる。例えば詩集『薔薇』(The Rose, 1893年)のなかの 'The White Bird' は、モードと一緒に白鳥に変身して現実から逃れるといった調子であり、そもそもこの詩集の“薔薇”そのものも、全てを超越した永遠の美の象徴であり、モードの美と重ね合わされる。

Who dreamed that beauty passes like a dream?  
 For these red lips, with all their mournful pride,  
 Mournful that no new wonder may betide,  
 Troy passed away in one high funeral gleam,  
 And Usna's children died.

We and the labouring world are passing by:  
 Amid men's souls, that waver and give place  
 Like the pale waters in their wintry race,  
 Under the passing stars, foam of the sky,  
 Lives on this lonely face.

Bow down, archangels, in your dim abode:  
 Before you were, or any hearts to beat,  
 Weary and kind one lingered by His seat;  
 He made the world to be a grassy road  
 Before her wandering feet.

(‘The Rose of the World’)<sup>(5)</sup>

イエイツは28才(1894年)になって、初めて女性と性的関係を持つ。小説家でもあり、当時ライマーズ・クラブ(Rhymers' Club)に出入りしていた、オリヴィア・シェイクスピア(Olivia Shakespear)という女性とその相手であった。彼女と従妹関係にあったライオネル・ジョンソン(Lionel Johnson)によって紹介されるのであるが、オリヴィアは裕福な家庭の人妻であり、夫との離婚を望んでいた。イエイツと彼女との関係は一年程続くのであるが、イエイツはその間、モードの事を忘れていた訳ではなかった。詩集『葦間の風』(The Wind Among the Reeds, 1899年)には、オリヴィアについて書かれた詩が三篇ある。モードへの思いを含む三角関係とも言える様子は、‘The Lover mourns for the Loss of Love’に描かれる。

Pale brows, still hands and dim hair,  
 I had a beautiful friend  
 And dreamed that the old despair  
 Would end in love in the end:  
 She looked in my heart one day  
 And saw your image was there;  
 She has gone weeping away.<sup>(6)</sup>

この詩は恋する女（オリヴィア）が、詩の主人公である男（イエイツ）の心の中に他の女（モード）の姿を見い出して、泣きながら去るといった内容である。いずれにせよ、この詩集全体も象徴的な手法に彩られており、実生活のヴィヴィッドな体験は、ロゼッティ風なスタイルによって夢幻の世界に退かされており、読者はロマン的な雰囲気しか感じえない。やはり、イエイツはこの面でヴィクトリア朝詩人の範疇に納まっていると言えよう。

## II

世紀の代わり目からイエイツは、1904年のアベイ座（Abbey Theatre）の開場に努力するなど、演劇活動に力を入れる。それと共に、演劇を通じてモードとの友情関係も依然として続けている。（劇『キャスリーン・ニ・フーリハン』（*Cathleen ni Houlihan*, 1902年）は、モードを主演に構成され、また彼女によって演じられた。）イエイツが現実詩人に変化し始めたといわれる詩集『七つの森にて』（*In the Seven Woods*, 1904年）には、モード・ゴン・サイクルというモードについて書かれた詩が多数ある。‘The Folly of being Comforted’ は、堅実なリアリズムの手法でモードを描いており、‘The Arrow’ でもやはりモードの美しさを讃美しているが、イエイツはこの“矢”に、こっそりと彼女に対する性的欲望の意味を忍び入ませている。

I thought of your beauty, and this arrow,  
 Made out of a wild thought, is in my marrow.  
 There's no man may look upon her, no man,  
 As when newly grown to be woman,  
 Tall and noble but with face and bosom  
 Delicate in colour as apple blossom.  
 This beauty's kinder, yet for a reason  
 I could weep that the old is out of season.<sup>(7)</sup>

‘Adam’s Curse’ にみられるが、1900年夏イエイツは、モードに四度目の求婚をする。しかしモードは、「あなたは私と結婚できないという不幸から正さに美しい詩を書けるのです。世界の人は、あなたと結婚しなかった事を私に感謝してくれるでしょう」と言って、その求婚を退けるのである。<sup>(8)</sup>このエピソードが示すように、この時期、イエイツのモードへの満されない愛（欲望）がその詩材になっており、また同時に詩作の原動力になっている。イエイツのこの求婚までずっと秘密にしていたのであるが、モードは若い頃からルシアン・ミールヴァ（Lucien Millevoye）というフランス軍人と愛人関係にあり、既に女子イーザルト（Iseult）を儲けていた。モードはこの愛人と疎遠になるにつれ、性的交渉を嫌うようになったという。これには、彼女がカトリックに改宗したことが原因しているかもしれない。イエイツ自身は、これが彼女が激しい社会運動や婦人解放運動へ身を挺する要因になっていると考えていた。いずれにしても、彼女は1903年にボーア戦争の勇士であるJ. マックブライド（J. MacBride）と結婚する。この結婚はイエイツに大変なショックを与えたが、かえって彼の禁欲主義を解放したようである。というのは、この後、イエイツはシェクスピア夫人との関係も回復させており、また他の女性達とも関係するようになる。そして詩作上での性的テーマも、徐々にそのベールが取り除かれるようになった。ところが、モードとマックブライドとの仲はうまくいかず、宗教上の理由から離婚にまでは至らなかったが、二人の別居が認められるということになった（1905年）。

これらの一連の出来事があった後、イエイツはモードとごく短い期間であるが（1907年終り～1908年初め

頃), 肉体関係を持つ。しかしその後すぐに, 二人はいわゆる“精神的結婚”の関係に戻っている。この“精神的結婚”というのは, 十年程前(1898年)に遡るが, 二人が結婚するという夢を同時に見たという話(両者のオカルティズムへの心酔からの影響によるもの)が基になっていて, 性的関係を持たない二人の交友関係を意味するものである。二人の性的関係の直後に, モードをモデルにした詩が, 詩集『みどりのヘルメットとその他の詩』(*The Green Helmet and Other Poems*, 1910年)に数篇ある。‘A Woman Homer sung’, ‘No Second Troy’などがそうであるが, 主にモードをトロイのヘレンに譬えて, 彼女の美しさを讃えている詩群である。“Words”では, 失恋の苦悩が詩人としてのエネルギーになっていると再び述べる。

I had this thought a while ago,  
 ‘My darling cannot understand  
 What I have done, or what would do  
 In this blind bitter land.’

And I grew weary of the sun  
 Until my thoughts cleared up again,  
 Remembering that the best I have done  
 Was done to make it plain ;

That every year I have cried, ‘At length  
 My darling understands it all,  
 Because I have come into my strength,  
 And words obey my call’;

That had she done so who can say  
 What would have shaken from the sieve?  
 I might have thrown poor words away  
 And been content to live.<sup>(9)</sup>

詩風からみると, 完全に現代詩人に変貌を遂げているとはいえ, 女性の神秘化・神話化という点において, 前世紀の詩人の残滓を留めていると言えよう。ところが, ‘King and No King’ という作品の最終部では, モードとの肉体関係のことが仄めかされる。イエイツが, ようやくモードとの性的関係の甘美さを大胆に回顧するのは, 次の詩集『責任』(*Responsibilities*, 1914年)のなかの‘Friends’ という詩においてである。(なおこの詩の冒頭には, オリヴィアとの関係も合わせて歌われている) さらに時代も下って, 1926年~27年に書かれた「若いときと老いたときの男」(*A Man Young and Old*) という連作では, イエイツ自身の過ぎ去った恋愛体験全般が回想されるが, そのなかの‘His Memories’ という詩では, モードとの1907年頃の関係が歌われており, ヘレンと称されるモードとのあからさまの性行為の場面が現れる。

The first of all the tribe lay there  
 And did such pleasure take—  
 She who had brought great Hector down

And put all Troy to wreck—  
That she cried into this ear,  
'Strike me if I shriek.'<sup>(10)</sup>

このように20世紀になると、イエイツとモードとの関係の詩をとうしても、ヴィクトリア期（中産階級）の禁欲的な性意識が、次第に薄まっていくのが見てとれる。これは19世紀において、深いところで徐々に進行していた下層階級の性革命が、中産階級にも浸透していった結果であると考えられる。特にこの流れを決定づけたのは、第一次大戦であった。大量の女性達が、戦場に旅立っていった男達に代ってその職場に立つことになった。女性の社会進出は、性解放の流れを増大させる。また医学（避妊）技術の向上は、この方向をさらに加速させた。結果、反動として、20年代に性的抑制が再び叫ばれるが、大きなうねりに逆らうべくもなかった。我々は、この意味で正しく「肉体の時代」<sup>(11)</sup>に置かれていると言えるが、20世紀の詩人の性のとり扱いは地上的・世俗的であり、ヴィクトリア朝期の詩人のような女性崇拜的・理想的・ロマン的な傾向はみられない。このことは、当然19世紀から今世紀への性概念の変化とも一致する。

ここで、イエイツがモードとの“精神的結婚”の状態に戻った頃の日記（1909年1月）を見てみよう。

それらは一体どういう結果になるのだろう。私はその事を、彼女と私自身のために恐れるのだ。彼女は私の全てを持っている。私は今ほど強く彼女を愛した事はなかったが、おのれの（肉体的）欲望の害悪から逃れるために、私は別のところ（女）へと向かわなければならぬ。私達を分つごたごたを、私はたえず恐れている。私は、いつも彼女が私を作り、私が彼女を作ったと思っている。彼女は私の純真であり、私は彼女の英知なのだ、昔は彼女は不死鳥で、私は彼女を恐れていたが、今は彼女は私の恋人というより、私の子供なのだ。<sup>(12)</sup>

この引用にはイエイツがモードに対する肉体的欲望に絶えず悩まされている様子が窺われるが、それを逸すための“別のところ（女）”の一人にM. デッキンソンという女性がいた。彼女は、イエイツの子供を妊娠したと知らせてくる。詩集『責任』のなかの“Beggars to Beggars cried”という作品は、その時のもよう——自分の性欲に対する幻滅が、アイロニカルに語られる。

'And get a comfortable wife and house  
To rid me of the devil in my shoes,'  
*Beggars to beggars cried, being frenzy-struck,*  
'And the worse devil that is between my thighs.'<sup>(13)</sup>

また‘The Dolls’という詩では、人形造りのおかみさんの最後のコミカルな台詞「まあ あんた ほんとうに まぐれで こうなっちゃたのよ」(‘My dear, my dear, O dear, / It was an accident.’) も、この件を扱っている。イエイツは、この時クールに滞在していたので、直ちにグレゴリー夫人 (Lady Gregory) にこの事を相談した。夫人はイエイツを早く結婚させねば、また同じ失敗を繰り返すかも知れないと考えたようである。ここで、全く同時期の日記（1909年1月）を、今一度覗いてみる。

今日P. I. A. L. (=モード) は、本当は決して私の計画や性格や考えを理解していないという思いが浮かんできた。それから次のように思った——かまうものか。私の事を彼女に説明することこそが、私がこ

れ迄してきた、そして今もしている最上の事ではないか。もし彼女が私を理解したならば、私はものを書く理由を失ってしまうだろう。そして普通、こんな骨折りな事をするのに、そんなにたくさんの理由を見い出せないものなのだ。<sup>14</sup>

ここでは、モードがイエイツを理解し受け入れたら、詩作の理由を失ってしまう旨の事が書かれているが、1900年の時の求婚の際のモードの拒絶の言葉と比べてみると、今度はイエイツの方が、二人の悲劇的（対立）関係を、詩作へのエネルギーへと積極的に転換しようとしていることがわかる。早くからブレイク (W. Blake) や東洋思想に親しんでいた詩人の根本哲学の一つは、自伝で述べているように「全ての創造は闘争から生ずる。」<sup>15</sup> というものであった。性は正に対立がその基盤となっている。イエイツのモードへの執拗な求愛は、その対照的性格——イエイツは本来内向的、モードの方は外向的性格にもその要因が認められようが、もしイエイツが望むように、二人の結婚によって対立が解決し統一 (Unity of Being) が得られたとしたならば、いみじくも自身認めるように、詩作の理由（エネルギー）を失うことになっていたかもしれない。

1916年に起きたイースター蜂起 (Easter Rising) の失敗によって、モードの夫マックブライドが処刑された。そこでイエイツはモードに最後の求婚をする。彼女に拒絶されると、(グレゴリー夫人の勧めもあったが) すぐに今度は、娘のイーズルトに結婚を申し込むのである。詩集『クール湖の白鳥』(The Wild Swans at Coole, 1919年) には、イーズルトについて書かれた詩がいくつかあるが、例えば、'The Living Beauty' は、彼女を題材にして対立するテーマである若さ—老、肉体—英知の問題が考えられ、その解決として硬質の美 ('Sailing to Byzantium' の黄金のナイチンゲールに具現する美) に向かおうとする。しかし、'Men improve with the Years' では、老年に差し掛りつつある詩人自身を表わす大理石の男人魚 (トリトン) は肉体の美に強く憧れ嘆息する。また 'To a Young Girl' では、イーズルトを通してモードとの愛の様相が語られるが、イエイツはイーズルトとモードの姿を重ね合わせる。イーズルトがこの結婚に乗り気でなかった事と、両者の星の相が合わないとの理由で、この結婚は成立しなかった。結局、イエイツは直ちにジョージ・ハイド＝リース (Georgie Hyde-Lees) と結婚する。<sup>16</sup> 結婚愛については、'Solomon and the Witch' にみられるのだが、結婚に先立つ数年前のソロモンとシバの関係を題材にした 'On Woman' という詩をみると (恐らくモードとの性的経験を基にして構想されたのであろうが)、イエイツは性愛を男女の対立を解決する象徴として描いていた。しかし結婚後に書かれた 'Solomon and the Witch' では、ソロモンはイエイツ夫人として登場するシバとの性愛 (の極点) は、対立の一瞬の解消にしか過ぎず、「新婚の床は絶望をもたらす」 ('the bride-bed brings despairs,') と述べるのである。これはイエイツがかつて日記に書いた「愛は仮面を創る」という言葉を思い起こさせる。ソロモンはさらに「恋人同士がそれぞれ、想像による心像をもちこみ、その床において実像を見いだすからなのだ。」 ('For each an imagined image brings / And finds a real image there: ') と続ける。これらはイエイツ夫妻の新婚生活が、当初うまく行かなかった事を物語るが、ともあれその直後、夫人が始めた自動書記 (automatic writing) に、イエイツは大いに驚かされることになる。それは晦渋な哲学書『幻想録』(A Vision) への集体成につながっていくのであるが、イエイツは男女を対立するガイアー (gyres) と考えるなど、「性」と「愛」と「オカルト」を混ぜ合わせて考えている。

### III

イエイツを今世紀の最も偉大な詩人の一人であるとの評価を決定づける詩集は、1928年出版の『塔』(The Tower) であるが、その前年から既に60才も過ぎた詩人と病との戦が始まっていた。肺充血と吐血に

はじまって、1928年にはマルタ熱に犯され——一時、生死を彷徨——各地で療養を重ねる。しかし次に出された『螺旋階段とその他の詩』(*The Winding Stair and Other Poems*, 1933年)の‘Words for Music Perhaps’には、性的でしかも非常に猥雑な詩がみられる。この詩群は療養地であるイタリアのラパロで書かれたのであるが、ダブリンに戻ってから、シェクスピア夫人に次の様な手紙を送っている。

「いかれジェーン」(‘Crazy Jane’)の詩とその後に続く愛の詩は、刺激的な風変わりな詩だと自分でも思います。性的禁欲が、これらの詩に火をつけたのです。…私は病いに犯されながら、なおも性欲に満ちていました。ときに私のもち得る最大の知的興奮を覚えながら書いたのです。<sup>(17)</sup>

‘Crazy Jane and the Jack the Journeyman’という詩には、死後、神のもとへ向かわず一人ぼっちで地上をさ迷うジャックの霊と性的結合を強く求める老婆ジェーンの姿がある。

I KNOW, although when looks meet  
I tremble to the bone,  
The more I leave the door unlatched  
The sooner love is gone,  
For love is but a skein unwound  
Between the dark and dawn.

A lonely ghost the ghost is  
That to God shall come ;  
I——love’s skein upon the ground,  
My body in the tomb——  
Shall leap into the light lost  
In my mother’s womb.

But were I left to lie alone  
In an empty bed,  
The skein so bound us ghost to ghost  
When he turned his head  
Passing on the road that night,  
Mine must walk when dead.<sup>(18)</sup>

イエイツの哲学によると、地上で激しい性愛を体験する男女は、死後に再び肉化してその経験を再現(再生)させるからである。(これを Dreaming Back と呼ぶ) また、性は男女の対立に基づいてその矛盾を解決するものとするが、性愛はさらに魂と対立する。ここにおいてイエイツは地上的なものつまり肉体に決定的に傾いていく。

1930年も過ぎると、グレゴリー夫人の死(1932年)による落胆も重なって、イエイツのインスピレーションが全く枯渇するという事態が生じた。この時イエイツは、自ら進んでスタイナツハ手術(Steinach operation)——生殖器に施す一種の回春手術であり、現在その効果は全くないものとされている——を受

ける。多分、イエイツはだいぶ以前から性的不能（インポテンツ）に陥っていたものと思われる。その例の一つとして、詩集『塔』のなかの長詩 'The Tower' をみると、この塔（バリリー塔）はイエイツの知的象徴ともされるが、一方塔の頂上の部分が実際壊れていたことから、性的不能・不妊の象徴と解釈するしかたがある。<sup>(19)</sup> 詩人はこの塔に佇んで、必死に想像力の回復を試み、次のように語りかける。

Does the imagination dwell the most

Upon a woman won or woman lost? <sup>(20)</sup>

この女がモードを指すことは言う迄もない。さてイエイツの手術であるが、担当した医師が、彼の性的能力の回復はどうてい望むべくもないと漏したという事実がある。しかし手術は、イエイツに精神面でその効力を発揮した。D. ウェルズリー (D. Wellesley) への手紙 (1936年6月) には、

手術がわたしにもたらした奇妙な第二の青春期のこのところ肉体的脆弱を進行させているようではありませんが、わたしの想像力のほうはたぎりたつ発酵状態にあります。これからさきわたしの書く詩はこれまでのとは似ても似つかぬものとなりましょう。<sup>(21)</sup>

と述べている。これを証明するかのように、詩集『最後の詩集』 (Last Poems, 1938-1939年) では、露骨な性描写がみられ、老人の色情が歌われる。イエイツは性欲と詩作は非常に密接な関係にあると考えていたようで、一方が衰えるともう片方も衰えるものと思っていた。

『幻想録』を説明しているシェクスピア夫人宛の手紙のなかに、イエイツの性に対する考え方の根拠がみられる。彼はこの本で、月の28相の満ち欠けを用いて歴史の盛衰を解説しているが、ここ2千年間の人類の歴史も四分割——古代・中世・ルネサンスに初まる近世・20世紀現代——され各時代に四大元素が当てられ、また人体の各器官が振り分けられている。

Waters under the earth } The Earth	The bowels etc.	<i>Instinct</i>
The Water	=The blood and the sex organ	<i>Passion</i>
The Air	=The lungs, logical thought	<i>Thought</i>
The Fire	=	<i>Soul</i>

The Earth	= Every early nature-dominated civilisation
The Water	= An armed sexual age, chivalry, Froissart's chronicles
The Air	= From the Renaissance to the end of the 19th Century
The Fire	= The purging away of our civilisation by our hatred

(on these two I have a poem) (L 825-5) <sup>(22)</sup>

そして四分割された各時代は、年周期でいう春・夏・秋・冬にも一致し、また人間の一生（幼年・青年・大人・老人）にも一致している。この表から分かることであるが、イエイツは性器を人間の一生での青春時代、文明では彼が最も好んだルネッサンスへとつながる騎士の時代へと照応させている。次に

四つの抗争

- 第1相では……………倫理的
- 第8相では……………情動的
- 第15相では……………肉体的
- 第22相では……………精神的, 超感覚的

憤怒, 空想など

- 第8相から第12相まで……………憤怒
- 第12相から第15相まで……………精神的ないし超感覚的憤怒
- 第15相から第19相まで……………空想
- 第19相から第22相まで……………権力<sup>(23)</sup>

この表は『幻想録』からのものであるが、イエイツが性的なものや情熱（晩年には激情・憤怒）とを関係づけた理由が、彼の哲学体系からも理解される。先のシェクスピア夫人への手紙でも、「私達は文明の最後の四分の一期に入りつつあり、魂の戦は肉体の回復に終わることになるでしょう。」と述べ、時代の周期が一順することを予想している。

この様に、イエイツはその晩年、性欲を詩作の源泉と考えたのであるが、その好例となるのが 'The Spur' という短詩であろう。

You think it horrible that lust and rage  
Should dance attention upon my old age ;  
They were not such a plague when I was young ;  
What else have I to spur me into song ?<sup>(24)</sup>

イエイツは色欲と激情が詩作の拍動となっていると高言しているのであるが、この詩はD. ウェルズリー宛の手紙(1936年12月)に同封される。そして手紙の最後に、「私の詩は全て激情と色欲から成り立っている(とあなたに以前お話ししました).」<sup>(25)</sup>と付け加えている。イエイツの晩年の若い婦人達(D. ウェルズリー, M. ラドック, E. S. ヒールドなど)との交際も、性的能力ひいては想像力の回復手段であったように思えてならない。そして、イエイツは死の数ヶ月前の詩 'Politics' においても、政治の話より「でもねえ私はああも一度若がり あの娘をこの胸に抱きしめたい！」('But O that I were young again / And held her in my arms!')と歌う程であった。幸いこれらの事は、彼の創作への原動力になったようであり、その想像力は死の直前まで続いたのである。そして、なによりもイエイツは、最後まで詩人でありたかったのである。

注

- (1) Denis Donoghue, ed., *W. B. Yeats : Memoirs* (London : Macmillan, 1972) 71—2.
- (2) エドワード・ショーター『近代家族の形成』田中俊宏他訳(昭和堂 1987年)第三章二つの性革命を参照のこと。
- (3) バーン&ボニー・ブロー『売春の社会史』香川檀他訳(筑摩書房 1991年)369—370.
- (4) Wendell S. Johnson, *Sex and Marriage in Victorian Poetry* (Ithaca & London : Cornell U. P.) 256—6.
- (5) Richard J. Finneran, ed., *W. B. Yeats The Poems* (London : Macmillan, 1983) 37.
- (6) *Ibid.* 61.

- (7) *Ibid.* 77.
- (8) 大浦幸男『イエイツをめぐる女性たち』(山口書店 1987年) 64.
- (9) Finneran 90.
- (10) *Ibid.*, 233.
- (11) スティーヴン・カーン『肉体の文化史』喜多迅鷹他訳(文化放送 1977年)を参照.
- (12) Virginia Moore, *The Unicorn* (New York: Octagon, 1973) 202.
- (13) Finneran 114.
- (14) Joseph Hone, *W. B. Yeats 1865-1939* (Harmondsworth: Penguin, 1971) 230.
- (15) W. B. Yeats, *Autobiographies* (London: Macmillan, 1964) 473.
- (16) イエイツがこの結婚を急いだ理由は占星術による。10月が結婚に適しているとされた。
- (17) Alan Wade, ed., *The Letters of W. B. Yeats* (New York: Octagon, 1980) 814.
- (18) Finneran 258.
- (19) Sara Youngblood, "A Rereading of the Tower," *Twentieth Century Literature* 5 (1959).
- (20) Finneran 197.
- (21) リチャード・エルマン『ダブリンの4人』大澤正佳訳(岩波書店 1993年) 52.
- (22) Wade 823-5.
- (23) W. B. イエイツ『ヴィジョン』鈴木弘訳(北星堂 1980年) 122-3.
- (24) Finneran 312.
- (25) Wade 871.